

原子力発電所周辺環境放射能測定結果の評価結果

平成14年11月29日
福島県原子力発電所安全確保技術連絡会

平成14年度第2四半期(平成14年7～9月)の測定結果は、次に示すとおりであり、環境安全評価 上問題となるものではありませんでした。

1 空間放射線

(1) 空間線量率

各測定地点の月間平均値は従来と同程度 であり、有意の変動 は認められませんでした。

また、1時間値では、平常の変動幅 の上限を超えた時間帯及び各地点の最大値の出現時には降雨が観測されており、すべて降雨による自然放射線レベルの変動 と判断され、発電所に起因する線量率上昇は認められませんでした。

(2) 空間積算線量

各測定地点の測定値は従来と同程度であり、発電所に起因する線量上昇は認められませんでした。

2 環境試料

(1) 大気浮遊じんの常時監視結果(全アルファ放射能及び全ベータ放射能)

各測定地点の全アルファ放射能及び全ベータ放射能の月間平均値は、福島県においては従来と同程度でした。また、東京電力(株)福島第一原子力発電所及び第二原子力発電所においては、福島県と同程度でした。

福島県において平常の変動幅の上限を超えた値が測定されていますが、気象要因による自然放射能レベルの変動と考えられました。また、東京電力(株)福島第一原子力発電所及び第二原子力発電所における最大値の出現は、いずれも気象要因による自然放射能レベルの変動と考えられました。

なお、発電所に起因する測定値の上昇は認められませんでした。

(2) 環境試料の全ベータ放射能

各環境試料の全ベータ放射能は従来とほぼ同程度であり、有意の変動は認められませんでした。

(3) 環境試料の核種分析結果(ガンマ線放出核種 及びトリチウム)

人工放射性核種として、セシウム-137が海水、牛乳、ばれいしょ、ぶた肉、松葉から検出されましたが核実験の影響 と判断される低いレベルでした。

なお、上水からトリチウムが検出されましたが、自然及び核実験の影響と判断される低いレベルでした。

(注) 印については、用語の解説(9ページ)を参照してください。

今期間の測定結果の概要

1 空間放射線

(1) 空間線量率

福島県23地点、東京電力(株)福島第一原子力発電所8地点及び福島第二原子力発電所7地点でNaIシンチレーション検出器により空間線量率を常時測定しました。

各地点の測定結果は以下のとおりです。

ア 月間平均値

各測定地点の月間平均値は、従来と同程度であり、有意の変動は認められませんでした。

空間線量率の月間平均値

(単位：nGy/h)

機関名	測定地点	月 間 平 均 値			過去の月間平均値	
		7 月	8 月	9 月		
福 島 県	23	3.6 ~ 4.7	3.7 ~ 4.8	3.8 ~ 5.0	3.3 ~ 5.2	
東京電力(株)	福島第一原子力発電所	8	3.2 ~ 4.0	3.3 ~ 4.0	3.3 ~ 4.1	3.2 ~ 4.5
	福島第二原子力発電所	7	3.7 ~ 4.7	3.9 ~ 4.8	3.9 ~ 4.8	3.8 ~ 4.9

イ 1時間値の変動状況

各測定地点における最大値は、各地点の過去の最大値を上回った地点がありましたが、これらの出現時には降雨が観測されており、原子力発電所の運転状況、放出状況及び気象状況から判断すると、降雨による自然放射線レベルの変動と考えられます。

また、38地点において計296回平常の変動幅の上限を超過していますが、同様のことから、降雨による自然放射線レベルの変動と考えられます。

空間線量率の最大値(1時間値)

(単位：nGy/h)

機関名	測定地点	月 間 最 大 値			過去の最大値*	
		7 月	8 月	9 月		
福 島 県	23	4.7 ~ 6.1	4.9 ~ 13.3	5.8 ~ 8.6	6.5 ~ 9.9	
東京電力(株)	福島第一原子力発電所	8	4.5 ~ 5.4	5.9 ~ 10.2	5.7 ~ 6.9	9.0 ~ 10.7
	福島第二原子力発電所	7	4.7 ~ 6.0	4.5 ~ 6.0	7.4 ~ 9.7	5.9 ~ 8.1

(注)* 各機関の最大値が、最小の測定地点～最大の測定地点の値を示しています。

平常の変動幅超過状況

機関名	測定地点	平常の変動幅超過回数						平常の変動幅 (単位:nGy/h)
		7月		8月		9月		
		上限	下限	上限	下限	上限	下限	
福島県	23	7 (5地点)	11 (2地点)	30 (12地点)	0	159 (23地点)	0	33 ~ 65
東京電力(株) 福島第一原子力発電所	8	0	0	19 (8地点)	0	28 (8地点)	0	30 ~ 57
東京電力(株) 福島第二原子力発電所	7	0	75 (1地点)	0	0	53 (7地点)	0	36 ~ 64

(2) 空間積算線量

今期間は、平成14年7月3日から平成14年10月3日までの92日間で、福島県15地点*、東京電力(株)福島第一原子力発電所16地点及び福島第二原子力発電所15地点で熱蛍光線量計により空気中の放射線量を測定しました。

90日換算値は従来と同程度であり、平常の変動幅を超えたものではありませんでした。

空間積算線量の90日換算値

(mGy/90日)

機関名	測定地点	測定期間 H14.7.3 ~ H14.10.3	過去の測定値	平常の変動幅
		積算線量		
福島県*	15	0.11 ~ 0.14	0.10 ~ 0.20	0.09 ~ 0.22
東京電力(株) 福島第一原子力発電所	16	0.10 ~ 0.13	0.10 ~ 0.17	0.09 ~ 0.18
東京電力(株) 福島第二原子力発電所	15	0.10 ~ 0.12	0.10 ~ 0.17	0.08 ~ 0.20

(注)* 福島県測定の15地点のうち、郡山地点においては、周辺環境の変化に伴い自然放射線レベルが変動したことから平常の変動幅を適用しないものとします。

2 環境試料

(1) 大気浮遊じん

福島県5地点、東京電力(株)福島第一原子力発電所及び福島第二原子力発電所がそれぞれ2地点で大気浮遊じんの全アルファ放射能及び全ベータ放射能の連続測定を実施しました。各地点の測定結果は以下のとおりです。

ア 月間平均値

福島県の各測定地点の月間平均値は従来と同程度でした。

東京電力(株)福島第一原子力発電所及び福島第二原子力発電所の月間平均値については、平成13年8月に機器更新を行い新たに測定を開始したため、過去の月間平均値を設定していませんが、福島県の過去の月間平均値と同程度でした。

大気浮遊じんの全アルファ放射能の月間平均値 (単位: Bq/m³)

機関名	測定地点	平均値			過去の月間平均値
		7月	8月	9月	
福島県	5	0.022 ~ 0.031	0.024 ~ 0.035	0.023 ~ 0.025	0.008 ~ 0.045
東京電力(株)福島第一原子力発電所	2	0.016	0.018	0.017 ~ 0.022	-
東京電力(株)福島第二原子力発電所	2	0.015 ~ 0.017	0.020 ~ 0.021	0.017 ~ 0.018	-

(注) * 平成13年8月から測定開始したので定めていません。

大気浮遊じんの全ベータ放射能の月間平均値 (単位: Bq/m³)

機関名	測定地点	平均値			過去の月間平均値
		7月	8月	9月	
福島県	5	0.039 ~ 0.053	0.042 ~ 0.058	0.041 ~ 0.047	0.021 ~ 0.076
東京電力(株)福島第一原子力発電所	2	0.031 ~ 0.032	0.033 ~ 0.034	0.034 ~ 0.038	-
東京電力(株)福島第二原子力発電所	2	0.035 ~ 0.038	0.042 ~ 0.045	0.038 ~ 0.040	-

(注) * 平成13年8月から測定開始したので定めていません。

イ 変動状況

福島県の各測定地点の最大値は、過去の最大値を上回ったものではありませんでした。

また、平常の変動幅の上限を超えたのは、全アルファ放射能が4地点で6回、全ベータ放射能が4地点で7回でした。これらの変動は、全アルファ放射能及び全ベータ放射能の相関関係、後述の核種分析結果から、気象要因(降雨、風速、大気安定度)による自然放射能レベルの変動と考えられます。

東京電力(株)福島第一原子力発電所及び福島第二原子力発電所の測定分については、平成13年8月に機器更新を行い新たに測定を開始しており、過去の最大値及び平常の変動幅を設定していませんが、福島県の過去の測定値と同程度でした。また、これらの変動は、全アルファ放射能及び全ベータ放射能の相関関係、後述の核種分析結果から、気象要因(降雨、風速、大気安定度)による自然放射能レベルの変動と考えられます。

については、用語の解説(9ページ)を参照してください。

大気浮遊じんの全アルファ放射能の最大値 (単位: Bq/m³)

機関名	測定地点	最大値			過去の最大値
		7月	8月	9月	
福島県	5	0.11 ~ 0.21	0.15 ~ 0.24	0.13 ~ 0.18	0.34
東京電力(株)	福島第一原子力発電所	0.091 ~ 0.12	0.098 ~ 0.11	0.093 ~ 0.12	-
	福島第二原子力発電所	0.080 ~ 0.086	0.13	0.097	-

(注) * 平成13年8月から測定開始したので定めていません。

大気浮遊じんの全ベータ放射能の最大値 (単位: Bq/m³)

機関名	測定地点	最大値			過去の最大値
		7月	8月	9月	
福島県	5	0.16 ~ 0.34	0.22 ~ 0.35	0.21 ~ 0.29	0.48
東京電力(株)	福島第一原子力発電所	0.13 ~ 0.17	0.14 ~ 0.16	0.14 ~ 0.16	-
	福島第二原子力発電所	0.13 ~ 0.15	0.20 ~ 0.21	0.16 ~ 0.17	-

(注) * 平成13年8月から測定開始したので定めていません。

全アルファ放射能の平常の変動幅超過状況

機関名	測定地点	平常の変動幅超過回数						平常の変動幅 (単位:Bq/m ³)
		7月		8月		9月		
		上限	下限	上限	下限	上限	下限	
福島県	5	0	0	4 (4地点)	0	2 (2地点)	0	0.11 ~ 0.24
東京電力(株)	福島第一原子力発電所	2	-	-	-	-	-	- ^{*2}
東京電力(株)	福島第二原子力発電所	2	-	-	-	-	-	- ^{*2}

(注)*1 下限値がゼロとなるため特に定めていません。

*2 平成13年8月から測定開始したので定めていません。

全ベータ放射能の平常の変動幅超過状況

機関名	測定地点	平常の変動幅超過回数						平常の変動幅 (単位:Bq/m ³)
		7月		8月		9月		
		上限	下限	上限	下限	上限	下限	
福島県	5	0	1 (1地点)	4 (4地点)	0	3 (2地点)	0	0.009 ~ 0.36
東京電力(株)	福島第一原子力発電所	2	-	-	-	-	-	- [*]
東京電力(株)	福島第二原子力発電所	2	-	-	-	-	-	- [*]

(注) * 平成13年8月から測定開始したので定めていません。

(2) 大気浮遊じん及び降下物の核種濃度

福島県5地点及び東京電力㈱福島第一原子力発電所、福島第二原子力発電所各2地点において採取した大気浮遊じんから検出された人工放射性核種はありませんでした。

また、福島県が2地点で採取した降下物から検出された人工放射性核種はありませんでした。

(3) 環境試料の全ベータ放射能及び核種濃度

福島県及び東京電力㈱福島第一原子力発電所、福島第二原子力発電所が今期間測定した環境試料(大気浮遊じん、降下物を除く)は、上水、海水、海底沈積物、牛乳、ばれいしょ、ぶた肉、鶏卵、なし、松葉、ほっきがい、ほんだわらの11品目で、合計59試料でした。

ア 全ベータ放射能

環境試料の全ベータ放射能は、牛乳において、平常の変動幅の上限及び過去10年間の測定値の範囲を超えています。後述の核種分析結果から自然放射能レベルの変動と考えられます。

なお、他の試料については、過去の測定値と同程度でした。

(ばれいしょ、ぶた肉、鶏卵、なしについては、平成8年度からの測定でありデータ数が少ないため、平常の変動幅は設定していません。)

環境試料中の全ベータ放射能

試料名	試料数	単位	測定値	過去10年間の測定値
上水	6	Bq/ℓ	0.03 ~ 0.08	LTD ~ 0.10
海水	10		LTD ~ 0.02	LTD ~ 0.07
海底沈積物	8	Bq/kg乾	364 ~ 734	211 ~ 958
牛乳	9	Bq/kg生	39 ~ 63	30 ~ 56
ばれいしょ	6		97 ~ 123	73 ~ 124 *
ぶた肉	1		82	78 ~ 100 *
鶏卵	2		37 ~ 38	35 ~ 40 *
なし	1		32	29 ~ 38 *
松葉	11		48 ~ 104	44 ~ 122
ほっきがい	1		71	61 ~ 102
ほんだわら	4		229 ~ 410	190 ~ 592

(注) 1. 「過去10年間」は、平成4年度から平成13年度です。

2. *については、調査対象とした平成8年度からです。

3. LTDは、検出限界未満です。

4. すずきについては、規定重量に満たないため参考値扱いとし、ここでは記載していません。

イ 核種濃度（ガンマ線放出核種及びトリチウム）

測定した環境試料のうち、セシウム - 137が海水、牛乳、ばれいしょ、ぶた肉、松葉の5品目の合計18試料から検出されましたが、核実験の影響と判断される低いレベルでした。

なお、その他のガンマ線放出核種については検出されませんでした。

また、トリチウムが上水の2試料から検出されましたが、自然及び核実験の影響と判断される低いレベルでした。

環境試料中のセシウム - 137濃度

試料名	試料数	単位	測定値	過去10年間の測定値
上水	6	Bq/ℓ	LTD	LTD
海水	10		LTD ~ 0.002	LTD ~ 0.005
海底沈積物	8	Bq/kg乾	LTD	LTD ~ 3.6
牛乳	9	Bq/kg生	LTD ~ 0.07	LTD ~ 0.21
ばれいしょ	6		LTD ~ 0.08	LTD ~ 0.11 *
ぶた肉	1		0.08	0.09 ~ 0.27 *
鶏卵	2		LTD	LTD ~ 0.02 *
なし	1		LTD	LTD *
松葉	11		LTD ~ 0.20	LTD ~ 0.58
ほっきがい	1		LTD	LTD ~ 0.07
ほんだわら	4		LTD	LTD ~ 0.13

(注) 1. 「過去10年間」は、平成4年度から平成13年度です。

2. *については、調査対象とした平成8年度からです。

3. LTDは、検出限界未満です。

4. すずきについては、規定重量に満たないため参考値扱いとし、ここでは記載していません。

環境試料中のトリチウム濃度

試料名	試料数	単位	測定値	過去10年間の測定値
上水	6	Bq/ℓ	LTD ~ 0.55	LTD ~ 2.0
海水	10		LTD	LTD ~ 1.4

(注) 1. 「過去10年間」は、平成4年度から平成13年度です。

2. LTDは、検出限界未満です。

【用語の解説】

環境安全評価

原子炉等規制法により発電所の周辺監視区域外での一般公衆の実効線量限度は1ミリシーベルトと定められており、環境安全評価上は、(原子力発電所周辺地域住民の健康と安全を確保する上では、)原子力発電所の稼働による住民の実効線量が敷地境界外で1ミリシーベルト/年を十分下回っていることが判断基準となると考えられます。

従来と同程度

空間線量率の測定値は測定装置の設置場所周辺の環境変化、測定機器の更新等により変動するため、それぞれの測定地点において同様の測定を実施しているとみなせる期間の値と比較して同程度と判断されます。空間積算線量、環境試料も同様です。

有意の変動

空間線量率や全ベータ放射能等の測定値に、統計的に見て何らかの変化が生じたと考えられるような値の変動のことをいいます。

平常の変動幅

測定機関で得られた多数の測定値を評価検討するにあたり、合理的、かつ容易に注目すべき測定値を抽出し、チェックできるよう「平常の変動幅」を設定しています。

この平常の変動幅は、過去の測定値をもとに統計的手法を用いて定めたものであり、通常の測定では、この値を超える確率は小さいと考えられます。しかし、(1)降雨雪等自然環境の変化、(2)核実験の影響、(3)測定器系のトラブル、(4)原子力施設の影響等により、この値を超える確率は通常よりも大きくなります。

したがって、測定値が平常の変動幅を超えた場合には、その原因について調査検討することとしています。

降雨雪による自然放射線レベルの変動

一般に降雨雪時には、空気中に舞い上がっているラドン、トロンとその娘核種及び大気浮遊じん等に含まれる自然の放射性物質が、雨滴等に取り込まれ地表付近に降下し、降り始めの一時期に空間線量率が上昇します。

また、降雨雪が多くなると地表の水分による放射線の吸収作用により、大地からの放射線が遮へいされ、空間線量率が低下することがあります。

ガンマ線放出核種

環境試料に含まれるガンマ線を放出する核種のうち原子力発電所からの影響を評価するため、クロム-51、マンガン-54、コバルト-58、鉄-59、コバルト-60、ジルコニウム-95、ニオブ-95、ルテニウム-106、セシウム-134、セシウム-137、セリウム-144を測定対象としております。また、ほうれんそう、牛乳、ほんだわら等については、これらに加えてよう素-131も対象としています。

核実験の影響

環境試料の核種濃度については、昭和55年以前に行われた中国の大気圏核実験の影響により、セシウム-137の放射能レベルの上昇が松葉などに見られるとともに、ほうれんそうなどの試料からジルコニウム-95、ニオブ-95、セシウム-137、セリウム-144などが検出されました。

その後、中国の大気圏核実験の停止に伴い、全体的に環境試料の放射能レベルは減少していましたが、現在に至っても、半減期の長いセシウム-137、ストロンチウム-90、プルトニウムが全国的に微量ながら検出されています。

なお、昭和61年に起きた旧ソ連チェルノブイリ原子力発電所の事故により、県内でもよう素-131、セシウム-134、セシウム-137などが一時的に検出されましたが、現在ではその影響は極めて小さなものとなっています。

大気浮遊じんの全アルファ放射能及び全ベータ放射能の相関関係

通常、一般環境の大気浮遊じんの全アルファ・全ベータ放射能濃度は、大気が安定し、風が弱いときは高い傾向を示し、降雨雪時や強風の時は低い、というように変動していますが、自然界のラドン、トロン濃度を反映し、一定の相関をもっていることが知られています。これに対して、人工の放射性物質を含む浮遊じんが降下すると、この相関からはずれません。これまで、中国の核実験や旧ソ連チェルノブイリ原子力発電所事故の際には、浮遊じん中の全ベータ放射能が高くなり、この相関から大きくずれた事例が見られました。